

自己有用感を高める異年齢交流活動の創造

～これが私たちの学校づくり「東四スタンダード」～

仙台市立東四郎丸小学校
校長 伏見 滋

I 主題設定の理由

(1) 学校教育目標・重点目標から

本校では「豊かな心を持ち、心身ともに健康でたくましく、自ら学ぶ児童の育成」を学校教育目標に掲げ、今年度の重点目標を「相手意識を持ち、自ら考え表現する力の育成」と定めている。本研究における異年齢交流活動を通して、児童一人一人の自己有用感を高め、相手の気持ちを考えたり、相手の気持ちを認めたりする「相手意識」を育むことは本校の学校教育目標の具現化を図る上で重要であると考えます。

(2) 本校の実態と教職員の思いから

本校は全体的に素直で人としての温かさがある児童が多い。反面、家庭環境が複雑で、様々な心の闇を背負って登校し、笑顔の裏側に多くの不安や悩みを抱えている児童が多く在籍している。自分に自信がなく、人間関係作りが苦手な児童も多い。また、発達障害の傾向が見られる児童の割合が高く、自己肯定感も全体的に低い。そのため学校生活の中でトラブルが多く発生し、数年前は校内に「荒れ」も見られていた。近年においても生徒指導上の問題は頻発しており、教職員が日夜、児童や保護者の個別の対応に追われている現状がある。

こうした実態を受け、本校では「異年齢交流活動」を学校生活全般に組み込みながら「相手意識」の向上を目指し、児童の自己有用感を育む教育活動に取り組んできた。誰かの役に立つ喜びを知ること、自分の存在価値に気付き、人と関わる楽しさを知り、思いやりを持って接する児童が増えるのではないかと教職員の思惑と願いがそこにはある。

異年齢交流活動に本校が力を入れて取り組み始めてから今年度で6年目を迎える。取組をスタートさせた時の1年生が最上級生となった今、6年間の試行錯誤と創意工夫によって完成した「東四スタンダード」と、これまで積み重ねてきた実践について、その成果と課題を明らかにしたいと考え本主題を設定した。

II 基本的な考え方

(1) 「自己有用感」とは

「誰かの役に立った。」「誰かを喜ばせることができた。」等、相手がいることを前提として高まるプラスの感情。自己有用感を高めることが、自己肯定感の向上につながると考える。

(2) 「東四スタンダード」とは

本校が独自に実践している異年齢交流活動の年間活動計画の総称。学年ごとに、活動内容や留意点が示されている。必要に応じて、加筆・改善を行い、内容の醸成を図っている。(※別添 資料)

(3) 「異年齢交流活動」とは

児童の自己有用感を高めるために、意図的に学年の枠を外して行う教育活動。特別活動、生活科及び総合的な学習の時間で行われることが多い。「きょうだい学年」での活動も推進している。「きょうだい学年」とは1・6年、2・5年、3・4年のペア学年の総称。

III 研究の基本方針

- (1) 児童の主体性を尊重する。
- (2) 「東四スタンダード」に沿って、全教職員で計画的に研究を進める。
- (3) 授業実践を重視する。「きょうだい学年」ごとに研究授業を公開し、全職員で授業の検討・検証を行う。
- (4) 異年齢交流活動の内容に応じて時数管理

を適正に行う。

- (5) 「相手意識」を育むために「対話スキル」と「語彙力」の向上を重視し、「話し合い活動」を積極的に取り入れる。

IV 研究の三本柱

①授業実践

②行事・日常活動の支援

③環境整備

V 研究の三本柱における私たちのこだわり（譲れないポイント）

(1) 授業実践における私たちのこだわり

- 研究授業は「きょうだい学年」ごとに行う。
- 全職員で研究授業の検討・検証を行う。授業検討会はファシリテーターとグラフィッカーを設定し、明るい雰囲気を大切に話し合い、自由闊達に議論しながら有効性と改善点を探る。
- 指導案の形式は本校独自の型を使用し、「きょうだい学年」ごとに作成する。
- それぞれの授業ごとに「視点」を設け、視点に迫るための「手立て」を明確にして実施する。

研究授業における視点の例

- (1) 自己有用感を高めるための工夫
- (2) 相手意識を持つための工夫
- (3) 関わりを深めるための工夫

(2) 行事・日常活動の支援における私たちのこだわり

- 児童の主体性を尊重しながら異年齢交流活動を推進する。
- 活動の振り返りを必ず行い、その都度、効果の検証を行う。改善・変更が必要な場合は速やかに「東四スタンダード」に反映させる。
- 全職員で全児童の支援にあたる体制を常に整え、行事等の担当者任せにはしない。

(3) 環境整備における私たちのこだわり

- 教室及び昇降口のシューズロッカーの配置は異年齢交流活動が行いやすい配置とする。
- 全職員で全児童を育てることができる職員の指導体制を工夫する。

○異年齢交流活動について、保護者・地域への啓発を積極的に行い、学校、保護者、地域の三者協働で児童の自己有用感の向上を推進する。

VI 実践の内容（研究の三本柱に沿って）

※コロナ禍で研究実践に多くの制限がかかった。感染対策を講じながら苦心の取組ばかりであったが、「三本柱」に沿って令和4年度の主な実践内容について紹介する。

【柱1 授業実践】

(1) 「きょうだい学年1・6年」の研究授業

日時：令和4年6月7日（火）5校時

教科領域：総合的な学習の時間（6年生）

生活科（1年生）

視点：相手意識を持つための工夫

本時の視点に基づく主な「手立て」

- ・活動の振り返りがしやすいように、交流活動時に視聴覚資料を多く活用したり、1年生同士でペアトークを行ったりした。（1年生）
- ・「座標軸チャート」を活用しながら、「1年生のためになるか」という視点で話し合い活動を行った。（6年生）

概要：それぞれの学級で話し合い活動を行った。4月から「1・6年ペア」を編成して活動を行ってきた取組について振り返りを行った。1年生はお世話をしてくれている6年生への「お返し」の内容を考えた。6年生は運動能力テストのお世話の仕方について話し合った。

(2) 「きょうだい学年3・4年」の研究授業

日時：令和4年6月30日（木）6校時

教科領域：総合的な学習の時間（4年生）

学級活動（3年生）

視点：自己有用感を高めるための工夫

本時の視点に基づく主な「手立て」

- ・複数の教職員で活動の様子を見取り、学年部マッチの終わりに児童の言動について「価値付け」を行う。（3・4年共通）
- ・会の終わりに活動を振り返り、児童同士で「一言メッセージ」を伝え合う。（3・4年共通）

概要：体育館に両学年が集まって「学年部マッチ」（ゲーム大会）を行って交流した。

今回は4年生が「企画」し、3年生が「招待」される形で行った。4年生は事前の学習で3年生を楽しませるためのアイデアを出し合い、工夫を凝らして当日に臨んだ。3年生は活動の最後に手紙を渡し「お礼の気持ち」を表すことができた。

（3）「きょうだい学年2・5年」の研究授業

日時：令和4年7月6日（水）5校時

教科領域：総合的な学習の時間（5年生）

算数科（2年生）

視点：自己有用感を高めるための工夫

本時の視点に基づく主な「手立て」

・2年生から5年生に「ヘルプ」を求める声を聞かせ、2年生から「必要とされている」という思いを持たせる。（5年生）

6年間の異年齢交流活動の中で初めて、5年生（上級生）が2年生（下級生）に算数の学習（時計の時刻を求める問題）を教える活動に挑戦した。

【柱2 行事・日常活動の支援】

（1）行事における支援

5月の運動会では「きょうだい学年」で練習に取り組んだり、表現活動を互いに見合ったりしながら交流した。6月の美化活動（勤労生産奉仕的行事）では「きょうだい学年」で協力しながら地域清掃等の活動に取り組んだ。

（2）日常活動の支援

取組開始から6年目を迎えた今、異年齢交流活動は学校生活のあらゆる場面で行われている。中でも1・6年生のペア活動は本校の特色の一つとなった。入学したばかりの1年生は6年生から小学校生活のアドバイスを受け、小学校生活に馴染んでいくことが伝統となった。6年生にとっても「最上級生」としての自覚を高める貴重な時間となっている。ほかに、休み時間、「なかよし交流会」、「東四タイム」等で異年齢交流活動が推進された。「東四タイム」とは規範意識の向上と望ましい基本的生活習慣を身に付

けさせることを目的に行っている本校オリジナルの活動である。

【柱3 環境整備】

（1）教室配置等

ハード面の整備も積極的に進めた。特に教室レイアウトと昇降口のシューズロッカーの配置を、より「きょうだい学年」が関わりやすくなるように工夫した。本校の教室およびシューズロッカーの配置は、1・6年生、2・5年生、3・4年生がそれぞれ隣同士のレイアウトとなっている。

（2）教職員の指導体制の工夫

6年間、「よってたかって子供を育てる！」を合言葉に全職員で全児童を見守り、育てることができ体制作りを目指した。

教職員の指導体制の工夫において重視したのは「スピード感」と「風通しの良さ」である。

また、本校は生徒指導が研究実践を行っていく上で重要なポイントとなることから、校内に「教育相談部」を設置し、経験豊富で児童理解に富む教員を部長に据え、部長のリードで生徒指導主任、児童支援教諭がそれぞれの役割を果たす仕組みを構築した。迅速かつ多角的に児童の指導や保護者への対応にあたるようにした。

（3）学校、保護者、地域の三者協働での取組

運動会等の学校行事でも異年齢交流活動を積極的に取り入れた。行事を保護者や地域への啓発・アピール場として活用した。

また、登下校時は異年齢のグループで歩くことが多いことから、朝と帰りの時間に児童の見守りと声掛けを教職員が昇降口付近で行うようにした。また、通学路を校長が毎日巡回しながら児童の見守り、声掛けを行った。民生児童委員、交通指導隊、町内会の皆様に構成されている「見守り隊」等とも協働しながら子供たちへの声掛けや励まし、見守りを行うようにした。

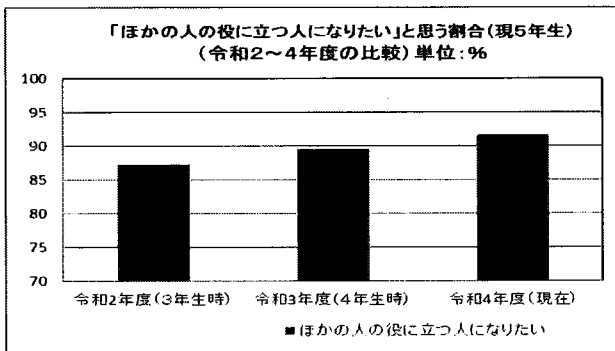
学校だより・ホームページ等でも「異年齢交流活動」の様子や成果について広く発信を続けてきた。

VII 実践の成果

これまで述べた取組の成果について考察する。

(成果1)「荒れ」からの脱却と「学校」の再生

異年齢交流活動に本格的に取り組み始めて6年目を迎えた。児童の自己有用感は緩やかであるが高まりが見られる(グラフ1)。多くの実践による確かな効果が認められた。



グラフ1

数年前まで散見されていた校内の「荒れ」は解消されたと言ってよい。粗暴な言動やトラブル等はまだ時折見られるものの、重大な暴力行為、器物損壊事案はなくなった。各学級では質の高い授業が展開され、校舎内には日々児童の歓声と笑顔があふれている。本研究の取組により学校が「本来の姿」を取り戻した。そして、学校が子供たちにとって、安心して学べる場であり、安心できる「居場所」となった。

「きょうだい学年」の取組は特に効果的であった。下学年が「お兄さん」「お姉さん」と上学年を慕い、上学年は自ら「手本」を示そうと主体的に行動し、かつ、下学年に優しく接することが本校の「当たり前(スタンダード)」となった。入学時に乱暴であったり投げやりであったりする態度が見られた児童も、学年が進むにつれ、生き生きと、安心した表情で学校生活を送れるようになる事例が多く認められた。

すべての教職員ですべての児童に寄り添い、頑張りを見逃さずに賞賛することができる指導体制が構築されたことも「東四スタンダード」を柱にした学校づくりにおいて極めて重要な点であった。すべての「大人」が同じ方向を向いて子供を育て

ようとする本校の風土が異年齢交流活動の質を更に高めていた。

(成果2)「相手意識」の定着化による「対話スキル」と「語彙力」の向上

授業実践をはじめ多くの取組によって児童の「対話スキル」と「語彙力」の向上が図られた。自分の考えを「自分の言葉」で表現できるようになった児童が増えた。相手の話をよく聞こうとする意識も全体的に向上した。かつて授業中、響いていた「うざい!」「だるい…」というマイナスの発言が教室から減少した。「優しい心」を素直に表現できる子供が増えた。

「相手意識」を育む授業の様子や取組の内容を保護者・地域へお便りやホームページで発信したことによる効果も大きかった。保護者・地域の方も「相手意識」への関心が高まり、そのことが保護者や地域の方が児童への励ましをこれまで以上に行うという好循環に結び付いた。

VIII おわりに ~実践の評価は子供の姿~

6年間に及ぶ本校教職員の情熱とチームワークによって、研究の三本柱に基づく取組が行われ、今、確かな成果と手応えを感じている。

すべての教職員が教育者としてのプライドと使命感を持って児童一人一人に寄り添いながら愛情をたっぷり注いで、6年間の異年齢交流活動で育て上げるスタイル「東四スタンダード」がここに完成した。

しかし、本校の研究はまだ道半ばであり、クリアしなければならない課題も多い。この研究実践の評価は子供の姿であることを改めて自覚しながら、今後も全職員で工夫と努力を重ね、子供たちのための研究実践に邁進していくことをここに誓い結びとしたい。

IX 参考文献

- ・「チーム学校によるこれからの学校経営」ぎょうせい 2016
- ・「授業の本質を問う」藤沢市教育文化センター 2016
- ・「カラフルな学校づくり」住田昌治 学文社 2019